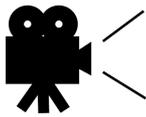


目の不自由な方々と共に映画鑑賞を楽しむことのできる環境づくりをしています。



ごあいさつ

シティ・ライツ代表 平塚千穂子

会報の原稿締め切りを1日過ぎてしまい、編集長の「どうなってますか？」の投げかけに、冷や汗をかきながら、この原稿を書いている今日、37回目のお誕生日を迎えました。ボランティア

団体の代表という、もっと歳を重ねた方のほうが多いので、はじめて会う人にはよく、「まあ、ずいぶんお若い方だったんですね！」と、びっくりされることが多かったのですが…いつ、びっくりされなくなるのでしょうか。複雑な思いのアラフォーです(笑)。とある占い師によると、私は次の誕生日から運気の低迷する「冬」を迎えるため、今年はいくつかの秋の収穫に感謝しつつ、冬支度をはじめなければいけないそうです。「冬」の時期に無理をすると、思わぬところで大失敗をしたり、健康を損ねたりするので、そうなる前に、後継者を探しておく、抱えている仕事の引継ぎをしておくなどして、「冬」にはあまり自分が動き回らなくてもすむようにしなさいね。と、アドバイスをいただきました。自分でも分担、引継ぎをしていかないといけないよなーとは、なんとなく思っていたものの、つつい期限に追われてしまうと、こんなに切羽詰まってからでは、さすがに人には頼めないよなー、とか、自分でやっちゃった方が早いよなー、と作業を抱え込んでしまいがちでした。これから一年はこの辺の問題を改善しなければいけませんね。活動を長く継続させるためにも、そして夢を実現させるためにも、自分ももっともっと勉強しなくてはいけません。活動から一歩ひいてみて、音声ガイドやバリアフリー、ボランティア、映画について、もっと広い視点で捕らえなおしてみるのもよいかも…等と思っています。

シティ・ライツで培ってきた経験やノウハウを、あちこちの地域に伝えていくことも、その一つにあたると思います。めぐり合わせでしょうか…今年はずいぶん、あちこちの地域に出向いて、バリアフリー上映のお手伝いをする機会や、大学や行政主催のセミナーなどに招かれて音声ガイドのお話をする機会、新しいグループの立ち上げに立ち会う機会がありました。つい先日も、埼玉県の鶴ヶ島で檀さんが講師をしてくださったライブ音声ガイドボランティア養成講座の成果発表会を見届けてきました。地域の視覚障害者グループと社会福祉協議会、そして地元映画館が協力して、新たに立ち上がる音声ガイドボランティアグループの活動を支援しながら、バリアフリー上映を地域に根付かせていくという、素晴らしい滑り出しでした。また、大阪の日本ライトハウス本館のリニューアルに伴ってはじまった「わろう座」というイベントにも行ってきました。「わろう座」とは、その昔、神々がお茶を飲んだり談笑したりしたという石の台座のことで、「笑う座」とも言うそうです。このイベントが皆の笑いが絶えない交流の場となるように名づけられたそうで、その記念すべき第1回が「おくりびと」の音声ガイド付き上映会でした。音声ガイドは「ボイスプラス」というできたばかりのボランティアグループが初挑戦したものでした。近畿地方の視覚障害者の方もたくさん集まり、音声ガイド付き映画をととても楽しんでいらっしゃいました。また今日は、浜松にも行ってきました。浜松には5年程前から活動を続けている「シーンボイス浜松」という音声ガイドのグループがあります。そのグループが地元の市民映画館と提携して、バリアフリー上映を行っていくことになり、この映画館で初めて音声ガイド付き上映するのが、中江裕司監督の「真夏の夜の夢」ということもあってFM送信のお手伝いをしてきました。こちらもとても盛況で、次回は11月に新作映画「プール」で、シーンボイス浜松が音声ガイド付上映を行うことも決まっています。地元の視覚障害者の方々も、あきらめていた映画を近くの劇場で頻りに観られるようになって、とても嬉しそうでした。

このようにあちこちの地域で、新しいグループが誕生し、映画館と連携したり、定期上映会を開いたりしながら、映画を共に楽しむ活動を展開しています。そして、それぞれの地域がそれぞれに工夫しながら、新しいコミュニティの輪を広げていて、皆さん笑顔があふれているのがとても素敵だなと思いました。こういう地域が益々増えて、広がるといいなと思います。そのためにも、音声ガイドに取り組む全国のボランティアグループが協力しあい、学びあい、それぞれの作った音声ガイドを共有したり、貸出したり、スキル提供できるような支援システムを作ることも、とても必要なことだと思います。10月4日には、全国のボランティアグループの代表者が集まって、音声ガイドの共有化やネットワークのあり方について会議を行います。これも冬支度の一つと思って、微力を尽くしたいと思います。



活動報告

～同行鑑賞作品～

このコーナーでは、7月～9月までに開催された音声ガイド付き上映会や、同行鑑賞会をレポートします。参加された皆さん、企画者そしてボランティアの方々お疲れ様でした。

- ・7月26日/ディア・ドクター/新宿武蔵野館 ・7月27日/嗚呼、満蒙開拓団/岩波ホール
- ・8月2日/劔岳・点の記/渋谷TOEI ・8月9日～10日/真夏の夜の夢/有楽町シネカノン
- ・8月22日/セントアンナの奇跡/テアトルタイムズスクエア(閉館記念企画)
- ・8月30日/ハリー・ポッターと謎のプリンス(吹替版)/ユナイテッドシネマ としまえん
- ・9月5日/HACHI 約束の犬(吹替版)/川崎チネッタ
- ・9月13日/20世紀少年 最終章 ぼくらの旗/ユナイテッドシネマ としまえん
- ・9月14日/ポー川のひかり/岩波ホール ・9月20日/南極料理人/銀座テアトルシネマ
- ・9月26日/幸せはシャンソニア劇場から/恵比寿ガーデンシネマ
- ・9月27日/BALLAD 名もなき恋のうた/川崎チネッタ



特集: OKINAWAレポート



ノンちゃんの沖縄レポート～夢がかなった3日間～



9月22日～24日の二泊三日の日程で、平塚リーダーを隊長に、米谷さんを専属ガイドとする「沖縄・桜坂ツアー」に参加してきました。このツアーが実現することになったきっかけが今年のシティ・ライツ映画祭だったので、その実行委員長をさせていただいていた私も仲間に入れていただいても許されるかしら？ってな具合でちゃっかりくっついて行って来たというわけです。ここではそのときの様子を、あくまでもノンちゃん視点？でご紹介してみたいと思います。

【旅の始まり】

平塚リーダーと空港駅で待ち合わせて団体カウンターへ。今回のツアーガイドの米谷さんはなんと20年前から沖縄へ通い続けているという超極めつけの沖縄通。なので、お手軽価格で行くことのできる航空券+宿泊プランを申し込んでおいてくれたのです。カウンターでチケットを受け取った後はちょっとめんどろなセキュリティチェックです。なんとと言ってもリーダーの荷物の中にはFM送信機や大量のラジオと言った普通の人から見ると意味不明な物が詰まっています。これらをバッグから取り出して検査を受けるので、けっこう面倒なのですが、まあそんなこともリーダーには慣れっこの様子で無事通過。定刻通りに飛び立った機内でおしゃべりしているとあっという間に那覇空港に到着です。空港で1便後の飛行機で到着する米谷さんを待つ3人そろったら、いよいよ本格的なツアーの開始！

モノレールに10分ほど乗るとホテルの最寄り駅に着くのですが、ここは今回のメインイベントの場所・桜坂劇場の最寄駅でもあります。位置的にいうと、那覇のメインストリート・国際通りの端っこに当たるそうです。できて間もないらしい綺麗で広々としたビジネスホテルのお部屋に荷物を置いて、早速近所をぶらぶら。豚足や沖縄独特のお魚などがずらりと並ぶ公設市場でエネルギーを感じたり、揚げたてホカホカのサーターアンダギー(沖縄の揚げドーナツ)をほおばったり・・・、もう気分はすっかり地元民？そこへ、米谷さんのご主人(この方もまた沖縄にはまりにはまっているそうです)がレンタカーで登場。短い時間でしたが、「真夏の夜の夢」の舞台となった伊是名島に行ってこられたお話などを楽しく聞きながら、これまた「真夏の夜の夢」の撮影で使われた港までドライブすることができて、ますます気分が盛り上がりました。

早速購入してしまったお土産をホテルに置いて、明日の音声ガイドつき上映に備えて機材のセッティングに向かいます。そこで私は初めて興行担当の下地さん、支配人の真喜屋(まきや)さんとご挨拶です。音声ガイドはどうやって作るのか？から始まり、見え

ない状態で映画を観るってどんなことか、どんな可能性があるのか、などなど話題は尽きることがありませんでした。もっともとお話していたい気もしましたが、明日があるので失礼し、近くのとっても美味しい中華屋さんで食事をしてから帰りました。余談ですが、この店のおじさん、一人でめっちゃ大変そうでした。で、その様子があまりに大変そうなので、店の中のお客さんが全員気をつけていたのが面白かったですよ。(笑)

【旅のメインイベント、幕開け】

今日もとびきりの晴天。午前中だけではあまり遠くには行けないから、お部屋で来年のシティ・ライツ映画祭の作品選びの作戦会議でも開こうと思っていたのですが、そんなことをしてはもったいないという気持ちがむくむくと盛り上がり、タクシーをお願いして近場の見所を2箇所訪れることにしました。米谷さんお勧めの場所の一つめは、垣花樋川(かきのはなヒージャー)。以前は急な崖のような道を100メートルほど降りて行かないと湧き水の近くには行けなかったそうですが、今は近くに車を止めることができるようになって行きやすくなっています。日本最南端の名水百選に選ばれただけのことはあり、さらさらと流れる湧き水は本当に透き通っています。水遊びする子どもたちもとっても気持ちよさそうで、思わず仲間入りしてしまいたくなるほどでした。さらに、二つめのお勧めの場所である新原(みーばる)ビーチに行くと、もうこのまま住み着いてしまいたい、何もせずに1日ぼ～っとしたい。そんな気分になってきます。観光客が多い万座(まんざ)ビーチなんかより絶対お勧めなのではないかと思えますよ。

こうしてしばし現実を離れた私たちもお昼過ぎにはちゃんと現実に戻って桜坂劇場へ。カフェでとっても美味しいお昼ご飯を食べてショップを覗いていたら、中江監督が登場。桜坂市民大学と名づけられた様々なワークショップやイベントに使われているという隠し部屋や映写室などを案内してくださいました。四方の壁が鏡やスクリーンになるお部屋やモニターの備えられたお部屋もあって、ここなら音声ガイド勉強会のやり放題だよ！とうらやましくなったりしました。



いよいよ14時40分。心配されたお客様も集まってきて、沖縄で初の音声ガイドつき上映の開始です。私ももちろん、場内で観ていましたが、なんだかストーリーそのもののメッセージだけでなく、様々な湧き上がってくる思いで涙が止まらなくなってしまいました。いい作品は何度観てもいい。そして、その作品をこの桜坂でガイドつきで観られたことに、素晴らしい縁(えにし)を感じて感謝せずにはいられません。上映終了後の監督のトークにも参加させていただき、監督が短い期間の中で、音声ガイドというものに対して熱いお気持ちを寄せてくださるようになったことにも感動しきりでした。それにしても、「できることなら視覚障害者の皆さんの頭を割って、どんな映像が浮かんだのかを見せていただきたいと思うくらい興味津々です。もしかすると実際の映画より素晴らしい作品ができあがっていたりして。」とおっしゃられたのには驚くと同時に、監督のお気持ちの広さに感激してしまいました。

これまた余談ですが、桜坂のスタッフの下地さんのお父様が、実は視覚障害者で、私が10数年前に海外旅行で一緒したことのある方だったというものすごい偶然の出会いもありました。下地さんとお父様との関係も、傍で見ているととても自然で微笑ましくて、偶然とは言え、こういう方のいる桜坂で沖縄県内初のガイドつき上映ができたことは、とてもラッキーだったのかもしれないなと思えました。

夜は中江監督お勧めのとってもヘルシーで美味しい沖縄料理のお店でご馳走になり、4時間近くも大盛り上がり。私たちが見たこともない料理の数々に「これは何ですか？」という度に、「食べてみて、当ててごらん」と嬉しそうに勧めてくださる監督。桜坂でのバリアフリー映画祭のアイデアを次々に語られる監督、映画への熱い思いを語られる監督、電車や火山のマニアとおっしゃる監督、広い言語学の知識を披露して下さる監督…。本当に話題はつきません。けれども、決して押し付けがましいところはなく、時にかわいらしいとさえ思ってしまうところがまた素敵です。また近い内に必ず沖縄に行きたい。桜坂に行きたい。監督ともお会いしたい。そう心から思った一時でした。

ほんの半年くらい前には夢というか、いつか行けるかなあという程度だった桜坂劇場訪問が、こんなにも早く、こんなにも素敵な形で実現できたのは、監督と私たちを引き合わせてくれた壬生さんの力があつたからにほかなりません。ここに改めてお礼を書かせていただきます。ありがとうございました。これからもこんな幸せな出会いがいくつもいくつも生まれますように…と願いながら、この報告を閉じたいと思います。



「真夏の夜の夢」の音声ガイドづくりに参加したメンバーからの投稿です。

作る側としゃべる側

瑞木よこ

「真夏の夜の夢」ガイド勉強会参加者募集！！この案内メールが届いたときに、勝手に運命的なものを感じた私は勇気を出して初の音声ガイド作りにチャレンジすることにしました。今まで同行鑑賞会や川崎チームの勉強会などでライブガイドを経験したことはあるものの、決まった尺の中にガイドを作っていく作業は想像以上に大変でした。「見たままを言葉にする」それだけの事なのに、しっくりくる表現が見つからない。情報を多くしすぎて尺におさまらない。一つ一つのシーンを、目を皿にして、何度も何度も繰り返し見ました。

私が担当したシーンで一番苦労したのが、主人公ゆり子と梨花が取っ組み合いのけんかをするとところ。役者さんが熱演していたので(笑)、セリフがよく聞き取れない上、動きが多い・早い。ガイドを入れる尺がほとんどない。でもどんな様子なのか伝えないといけない。半べそになりながら作りました(笑)。担当シーンの発表のときは心臓バクバク。リーダーに突っ込みを入れられるほど緊張していたのを覚えています。オーディションを受けているような感じでしたね(笑)

また、今回はナレーションを読ませていただく事もできました。仕事ときは読むことに精一杯で、原稿を書いた方の気持ちまで思いやる余裕なんてなかったけれど、自分も作成に関わったガイドを読めたことはとても感慨深く、言葉に重みを感じました。一つ一つのシーンに自然と感情移入しながら読めた気がします。

劇場で上映されたときは、自分の声がちゃんと聞き取れるかどうか・視覚障害者の方の反応がとても気になり、不審者状態での鑑賞でした(笑)。でもエンドロールで自分の名前が読まれるのを聞いたとき(自分で自分の名前を読んでいるのですが…)「あーやってよかったなあ」と泣きそうになりました。

一つの作品で、作る側としゃべる側、両方経験できたことは本当に勉強になりました。「真夏の夜の夢」という映画をお腹いっぱい味わうことができたと思います。



特集

映画祭をめぐる～ヴェネチア映画祭を知ろう～

今回から新コーナーを設けました、テーマは映画祭についてです。現在、世界中でさまざまなコンセプトの上に立った映画祭が催されています。シティ・ライツにおいても過去2回、行っていますね。映画祭ってよく聞くけどいったことがないし、そもそも中身をよく知らないよ～という方のために、映画祭について特集をしていきたいと思います。今回は、入門編ということで、世界でもっとも有名な映画祭のひとつ、ヴェネチア映画祭についてレポートします

<概要>

イタリアのヴェネチア、リド島で毎年8月末～9月初旬に開催される映画祭。世界で最古の歴史を持ち、カンヌ国際映画祭、ベルリン国際映画祭とともに世界三大映画祭の一つに数えられる。世界各国からコンペティション作品や招待作品が集まり、100本近くの作品を上映する。始まりは1932年、現代美術展ベネチア・ビエンナーレの一部門として始まった「ヴェネチア映画芸術国際展」。2年後に第2回が開催され、この年からコンペティション部門がスタート。自由な作品上映を目指して始まったが、政治介入や第2次世界大戦の影響から中止や変更を繰り返した。

36年にはムッソリーニ賞が設定されるなど、独裁政治家だったムッソリーニのプロパガンダとして映画祭が開催されるようになる。大戦中は規模が縮小し、参加国も激減した。43～45年まで戦争のために中止。46年に再開してからは毎年開かれている。

49年から最高賞を金獅子賞とするが、69年にコンペティション部門が廃止。しかし、71年にはジョン・フォード、72年にはチャールズ・チャップリンに、優れた作品を生み出し続けた監督を称える栄誉金獅子賞が贈られ、少しずつイメージ回復を遂げた。80年になりよ

うやくコンペティション部門と金獅子賞が復活。うやむやだった開催数も81年を第38回と定め、体制を整えて威光を取り戻していった。本賞の種類は、最高賞の金獅子賞、監督に与えられる銀獅子賞、審査員特別賞、ヴォルピ杯(男優賞、女優賞)、新人俳優に贈られるマルチェロ・マストロヤンニ賞、オゼツラ賞(撮影賞、脚本賞)、特別獅子賞、新人監督賞、栄誉金獅子賞、今後の活躍が期待される監督への監督・ばんざい!賞。本賞の他、協賛団体の出す賞もある。

日本映画の主な受賞作としては、第12回(1951年)に黒澤明監督の「羅生門」が日本人監督として初めて金獅子賞を受賞。第19回(1958年)には監督・稲垣浩、主演・三船敏郎の「無法松の一生」がやはり金獅子賞を得た。さらに、第54回(1997年)には北野武監督が「HANA-BI」で金獅子賞を、第62回(2005年)には宮崎駿監督が栄誉金獅子賞を受賞。第65回(2008年)は北野武監督の「アキレスと亀」、宮崎駿監督の「崖(がけ)の上のポニョ」、押井守監督の「スカイ・クロラ」がコンペティション部門にノミネートされた。いずれも高い評価を得たが、受賞は逃した。

<補足>

概要だけでは面白くないので、その他もろもろ情報など

3年前、旅行でヴェネチアに行きました。ご存知かと思いますが、ヴェネチアには車では入れません。駅(ミラノ中央駅から3時間ほどで到着するサンタ・ルチア駅、途中にロミオとジュリエットの舞台になったヴェローナ駅があります)から定期的に運行している水上バスにのるか、対岸の空港(ミラノ空港から1時間ほどで到着するマルコ・ポーロ空港)からタクシー(モーターボートのこと)を利用するかです。ナポレオンをして世界で最も美しい広場といわしめたサンマルコ広場をはじめ、贅の限りを尽くしたサンマルコ大聖堂やドゥカーレ宮殿など、言葉に出来ないくらいすばらしく美しい町です。キャサリンヘップバーンが主演した「旅情」やトーマス・マンの中篇をルキノ・ヴィスコンティが映画化した「ヴェニスに死す」の舞台にもなっています。リド島は本島から東南にある細長い島で、水上バスでもっとも遠いところになります。映画祭の舞台ということで訪れましたが、残念ながらリド島には見るべきものはあまりありませんでした……



勝手におすすめシネマ Vol.10 『選挙』

今年は長雨の影響もあって比較的涼しい夏でしたよね。

でも、一方で、ものすごく熱い夏でもありました。その原因とは……、もちろん、選挙！政権交代のかかった今年の衆院選の盛り上がりは、まだまだ皆さんの記憶にも新しいかと思います。民主党が大勝利鳩山内閣が発足したわけですが、実にこの4年前、我々は全く逆の小泉自民党の時代にあったのです。

というわけで、今回は、懐かしの小泉フィーバーの中で行われた選挙についてのドキュメンタリーをご紹介します。

『選挙』(2006年) 監督:想田和弘(そうだ かずひろ)

2007年ベルリン国際映画祭正式出品作品

2005年夏、小泉劇場まっただなか。

東京で切手コイン商を営む「山さん」こと山内和彦が、自民党から突然「川崎市議会選挙の候補者公募に応募しないか」との誘いを受けた。小泉首相の大ファンだった山さんは、その場で決断を迫られ「じゃあ応募します」と即決断。

しかし、山さんは政治家秘書の経験もない、いわば政治の素人。しかも、選挙区はほとんど縁もゆかりもない川崎市宮前区。地盤どころか後援会すらない。そして多額の選挙費用はほとんど自腹。負ければ借金だけが残る大博打なのである。

一方、自民党にとっては市議会与党の座を守り抜けるか否かの大事な選挙。地元選出の自民党議員や秘書たちによる激烈な戦闘態勢が生まれ、世にも過酷な“どぶ板選挙”がはじまった。

民主党などから公認されたベテランのライバルたちに、果たして山さんはどこまで対抗することができるのか？

政党のイメージ戦略として、政治素人でも得票率を稼げそうな人物を立候補させるというのはよくある話ですよ。有権者から見

て、身近に感じられる頑張っている人というのは、実際に応援してみたいものだったりします。

でも、そんな純粋な努力の裏側には、ものすごく大きな政治のうねりがあり、とてもじゃないけど一筋縄ではいかない、そんな何かがあるはず。

山さんは監督にとって大学時代の同級生だとか。監督はニューヨーク在住なんですけど、知人がこんなおもしろい状況にあつたらカメラを回さない手はない！と思ったんでしょう。日本に帰国してたった一人で取材・撮影し、自主制作という形で映画にしたというわけです。

さて、そんな『選挙』を、選挙に燃えた2009年、鑑賞してみたいはいかがですか？

(大田悠子)



思い出の映画

一思い出は、名画とともにいつまでもー。

このコーナーでは“思い出の映画”にまつわる投稿エッセイをご紹介します。皆さんの汗と涙の人生をセピア色に彩る素敵な名画の数々をエピソードとともにお寄せ下さい！！

思い出の映画

<モグタン>

中途障害の私には「思い出の映画」と言われて何か一つをあげるなんてのは難しいですね。

最初に劇場で見た「ゴジラ対ヘドラ」それとも、あまりの恐怖に気分を悪くした「エクソシスト」、あの感動した、悲しみに思わず落涙した感動作？それともカンフーのカッコよさに酔った「燃えよドラゴン」、いやいや手に汗握るアクションに、パニックに息を詰めて見つめたあの映画？大好きな007シリーズで大活躍するジェームズ・ボンドのかっこよさや秘密兵器に酔ったあの映画？「宇宙戦艦ヤマト」や「となりのトトロ」などのアニメも忘れてはなりません！！。

数え上げればきりがなく、どれか一つを選ぶなんて絶対無理！！なんて考えていたのですが、フツと思い出したインパクトのある映画がありました！それは「ボディガード」という、あのホイットニー・ヒューストンの映画です。当初は候補にすら挙がらなかったのに、なぜこれが「思い出の映画なのか？」それには本当なら封印したいほどの苦い思い出があるからです。

簡単に映画を紹介すると。

ホイットニー・ヒューストン演じる主人公のもとに1通の脅迫状が届き、周囲の人がボディガードを雇うことになるが、当の本人は至って無関心で忠告をまるで聞き入れず、今までの生活スタイルを頑なまでに守ろうとする。だが危険が迫り、同居する美しい姉と息子と共に密かに身を隠すことに！。だいたいこんな感じのストーリーでした。

見終わって彼女と映画談義を始め「主人公はワガママだ！身勝手だ」と述べた瞬間、猛反撃？このあたりがどうも男と女の感性の違いみたいです(女心の判らないモグタンでした)。

演出や、出来映えなどで意見が異なるのは致し方ないと思いますが、感情論では女性にはかなわない??

その後のデートは気まずいままでも美味しいはずの食事味も味がわからないし、その後も仕事などですれ違いばかり！！今と違い携帯電話もメールもない時代だったので「ああ、こんなつまらない事が原因で別れるのかなあ？」と本気で落ち込んでしまった映画でした！

ここで教訓です！「恋人と映画を見ても、映画談義はすべきじゃない！！」なんてね。おそまつ。

でもでも、これって思い出の映画になるのかなあ・・・(笑)

つたない文章に最後までおつき合いいただきありがとうございました。

『ボディガード』1992年 アメリカ映画

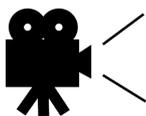
監督 ミック・ジャクソン 出演 ケビン・コスナー、ホイットニー・ヒューストン

(あらすじ) 脅迫状が次々と送り付けられる傲慢な女性シンガーを、敏腕ボディガードが警護することになるが、陰悪な関係から次第

に愛情が芽生え始める。しかし魔の手は次第に過激さを増し……。

(シネマトゥデイ)





お知らせ

■新規会員のご紹介

(2009年6月15日～2009年9月30日までにご入会いただいた方々です。)

[正会員] ・鈴木理恵子(神奈川県横浜市在住) ・中村 晴夫(東京都昭島市在住)

・野澤 文雄(東京都豊島区在住) ・小山田早苗(埼玉県富士見市在住)

[賛助会員] ・石渡 淑子(神奈川県海老名市在住) ・斉藤 江美(東京都杉並区在住)

・蒔田 麻耶(神奈川県横浜市在住) ・青木恵美子(東京都豊島区在住)

■「RISE UP(ライズアップ)」音声ガイド付きで公開予定

パラグライダーに夢中になった少年と、盲目の少女の成長を描いた青春ラブストーリー『RISE UP(ライズ・アップ)』が、11月21日より、渋谷ユーロ・スペース他、各地の劇場で公開されます。只今、シティ・ライツが勉強会の課題作として音声ガイドを制作中。聴覚障害者用日本語字幕の制作には京都リップルが協力し、公開期間中にバリアフリー上映を実施する予定です。(日時が決まり次第メーリングリスト等でお伝えします。)

『RISE UP(ライズ・アップ)』 配給: S・D・P/ビデオプランニング

監督: 中島良 脚本: 入江信吾 出演: 林遣都/山下リオほか

<あらすじ> 一年前、事故により失明してしまった少女・ルイ。未だそのショックから立ち直ることができずにいるルイは、わがままな日々を過ごしていた。そんなある日、航と出会う。パラグライダーに熱中する航は、めったに発生しない“ライオン”と呼ばれる強力な上昇気流に乗ることができれば、きっと自分は何か成長できると信じていた。ルイは、航に次第に心を開いていき、失明のショックから立ち直るきっかけを探そうとする。互いに惹かれ始める二人。しかし、二人の出会いには残酷な事実があった。厳しい現実と直面しながらも、ルイのため自分にできることを必死で探す航。二人はこの困難を乗り越えることができるのだろうか。



【リーダー'sコメント】 この映画とシティ・ライツとの縁は、撮影に入るずっと前の2月にさかのぼります。まず、監督から「ふれあいの輪」というグループを經由して、シティ・ライツ会員のウキちゃんに連絡がありました。「この映画は、目の見えない少女を大空に飛ばそうと奮闘する少年たちの爽やかな青春物語。ストーリーを実感や現実に即したものにするために取材にご協力いただきたく、演技指導の協力をしてくれる人物も探している。」といった内容のメールでした。当初は主演の林遣都くんや山下リオちゃんを、シティ・ライツのボランティア活動に参加させたいというご相談でもあったのですが、お二人とも忙しくて、こちらの鑑賞会と予定があわず、残念ながら実現できなかったのです。(その方が、林くんを誘導してもらいたい視覚障害者女子の喧嘩が勃発しなくてよかったかな?)でも、監督が「是非、お会いしたい」と言って下さったので、ウキちゃんと二人で会ってきました。監督に関してはほとんど情報がなくて、どんな方なんだろうとドキドキしながらでしたが、会ってみると、「なんとまあ、かわいらしい！」大学生のように若い監督でした。でも見かけによらずスゴイ方なんです。第29回びあフィルムフェスティバルにて審査員特別賞、エンターテイメント賞、技術賞の3冠を受賞し、第7回ニューヨーク・アジア映画祭では最優秀新人賞も受賞して、世界各国の映画クリエイティブから注目を集める新進気鋭の監督、と紹介されています。本作はその中島監督のデビュー作となるのです。確かに話してみると芯のしっかりした、凡人とは違う嗅覚をもった方だなと感じました。監督は、以前、視覚障害者の写真展というのをみて「見えている人のとる写真は、キレイに撮ることを意識してしまって、被写体の息づかいが聞こえない。でも、視覚障害者がとった写真をみた時、構図やバランスの美しさよりも、被写体の息づかいが聞こえることに驚いた。この「視覚障害者の撮る写真」を本作のモチーフとして生かしたい！」と、そんなことを熱く話してくれました。さて、そんなこともあり、「RISE UP(ライズ・アップ)」の公開を記念して、11月3日(祝)より、学芸大学近隣にあるカメラピープルストア モノグラムにて、「盲人写真展」の開催も決定しました!! 只今、10月23日(必着)で、写真展に出品する作品も募集しています。応募資格は、視覚に障害をお持ちの方で、テーマは自由です。選考結果は、10月下旬にRISE UP公式ブログ及び電話にて発表されます。当選者には映画オリジナルグッズの贈呈もあるそうです!! チャレンジしてみてもいいかな?

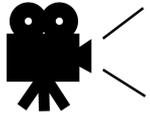
【盲人写真展のお知らせ】

日時:11/3(祝)~15(日) (期間中の木・金・土・日・祝の11:00~20:00に開催)

場所:カメラピープルストア monogram2F ギャラリー(東京都目黒区鷹番 2-19-13) 入場無料

アクセス:東急東横線「学芸大学」駅下車徒歩2、3分

★問い合わせ カメラピープルストア&ライブラリ「monogram(モノグラム)」TEL:03-3760-5852



編集後記

(会報編集課 ノンちゃん)

今年の夏は記録的に日照時間が少なかったとのことで、お野菜の値段が驚くほど上がっていますね。困ったものです。そんな中、野菜の値段とは全く関係のない話ですが、アニメ『サマーウォーズ』を観ることができたのは最大の収穫でした。この作品は『時をかける少女』と同じ細田守監督作品ということで、ずっと楽しみにしていました。9月に入って間もないとある日に、ようやく観ることができて、しかも、期待を裏切らない素晴らしい作品で大満足。タイトルに「ウォーズ」という言葉がついているとおり、世界の危機を救う戦いが繰り広げられるのですが、そのシーンはガイドなしではとても細部まで理解することはできません。けれども、その映像が分からないということを全く気にすることなく作品世界にぐいぐいと引き込まれていました。不思議な気もしますが、それはきっとこの作品のメッセージが素晴らしかったからに違いないと思います。一言で言ってしまうと、人間ってけっこうすごい力を持っているんだ。みんなで知恵を絞ってその力を発揮しあえば解決できることはたくさんあるんだ。そんな気持ちにさせてくれる映画でした。

(会報編集課 大田)

今年は涼しくなりはじめるのが早かったと思いませんか? 今夜の我が家の献立は、夏が終わってはじめての鍋です。

いやいや、鍋っていいですよ! なんてたって、簡単ですもん! 私のように仕事と家事を両立しなければいけない女性の強い味方です。それからそれから、もっといいことはというと……、一緒に鍋を囲んだ人たちと仲良くなれるということ。友達だって、夫婦だって、家族だって、仲良くないつまらないけど、一緒に鍋をつつけば仲良くなれる、そんな気がしませんか?

さて、鍋の季節に突入ですよ! みんなが仲良くなれる季節、あったかい季節の到来です。

(会報編集課 吉川)

みなさんこんにちは、これが届くころにはだいぶ涼しくなっていることでしょう。今年は冷夏でしたね。秋号の時期になると3年連続で政権が変わっています(笑)。みなさんは投票に行きましたか? 日本中が現状に対して不満を抱き、また将来に対して不安を抱いているのでしょうか。最近、週末断食を始めました、といっても何も食べないわけじゃなく土曜日の夜から食事を少なめにしていき、日曜日の昼間で(12時間くらい)ジュース類しか口にしない。(野菜ジュースと、フルーツを食べています)お通じがよくなり、体が軽くなったりして結構快適です。聞くところによるとダイエットにもよいとか、興味ある方は実践をお勧めします。

お忙しい中、今回の会報作成に協力いただいた方々には、大変感謝しております。ありがとうございました。

皆さまの投稿を、心よりお待ちしております。宛先は、kaihou@citylights01.org。次回の発行は 2010 年1月10日。投稿される方は、12月第2土曜日までをお願いします。『会報のデータ送信』を希望の方には、会報のテキストメール送信にも対応します。ご希望の方がいらっしゃれば、会報編集担当アドレス<kaihou@citylights01.org>まで、氏名と会報の送信を希望するメールアドレスを記入して、お申し込みください。

2009 年秋 2009 年 10 月 10 日発行 編集:吉川 俊平、齊藤 恵子、大田 悠子
発行者:バリアフリー映画鑑賞推進団体 シティ・ライツ
事務局:〒114-0016 東京都北区上中里 1-35-15 TEL&FAX 03-3917-1995
E-mail mail@citylights01.org URL http://www.citylights01.org

